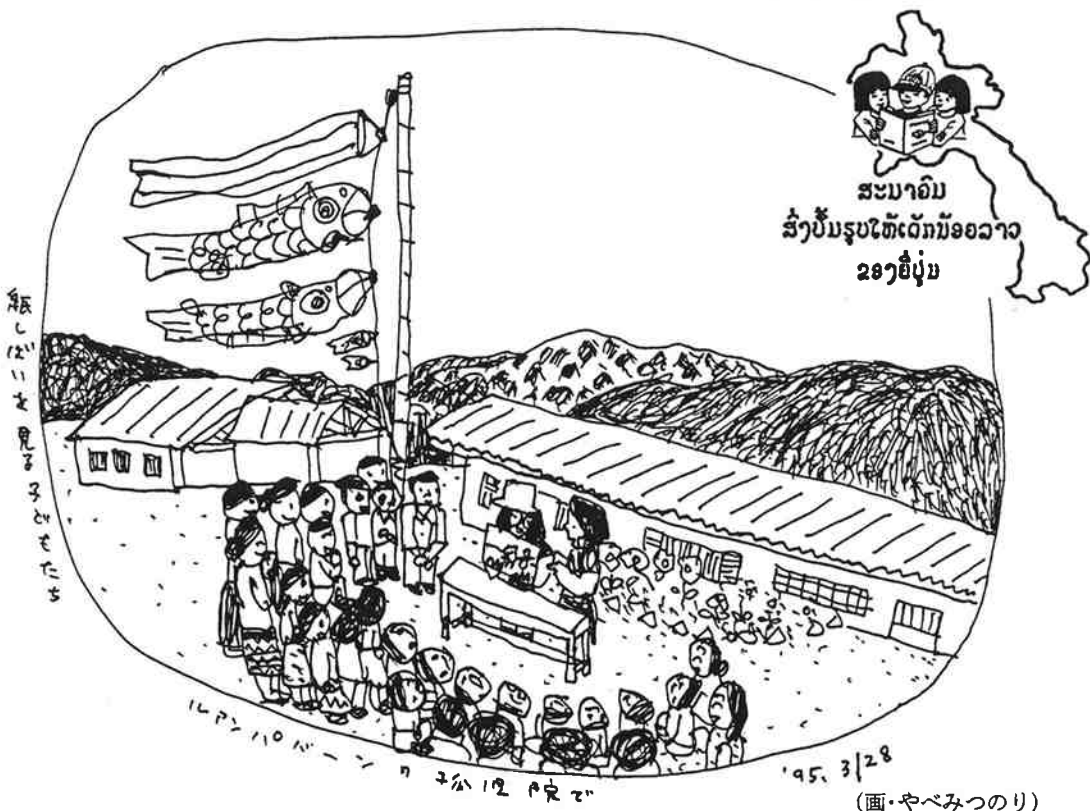


ラオスの子供に絵本を送る会通信

第6号(1995年11月発行)



絵本、おもちゃづくりの8日間

——「専門家派遣セミナー」の報告——

編集部

95年3月、ラオスで「専門家派遣セミナー」を行いました。これは絵本づくりに携わっている人々(日本でなら作家となる)と教員を対象とした研修で、日本から絵本作家の若山憲さん、紙芝居作家であり子どものための造形教室を行ってきたやべみつりさんを講師に派遣し、講義と実習を行いました。

この企画の背景には、子どもたちの読書推進や情操教育には教員の意識向上が不可欠であること、1年前からスタートしたCCCの活動である図書室、絵画教室、古典舞踊教室、音楽教室などが着実に子どもたちの心をとらえてきているなかで、会の支援も資金面だけでなく、専門技術というソフトの協力をめざすという段階に入ってきたのです。

情報文化省の「子ども文化センター」(CCC)が主催し、会が支援する形で行われた今回のセミナー。ヴィエンチャンでは、隣県のサヤプリ、ポリカムサイからも参加しました。集まったのは、幼稚園から高校までの教員、そして作品の出版をめざしている人など合計約30名。

当初の計画では、対象は、作品を募集して優秀な作品をつかった人に

絞るということでした。でも、せっかくの機会だからということで、CCC側では、結果的に対象を広げていました。すでに絵本の作品を出している人もいたものの、初めて絵筆を持ったという人も来ていました。現在のラオスでは作家という職業がまず成り立ちません。なぜなら本の流通、本のマーケットがあまりに小さく、ほとんど無いような状況だか

らです。

初日、若山憲さんは、「子どもが初めて出会う絵本」のテーマで講演をしました。

——絵本の原点は、お母さんが赤ちゃんに話しかけることばです。赤ちゃんはお母さんの心地良い響きの言葉を耳にしてすこやかに育ちます。そういう心構えで絵本を

つくりましょう。——これがその趣旨で、ラオスの子ども向けの本は、どうしても大人が子どもに教え諭すという視点でつくられてきたので、貴重な講演となったようです。

ワークショップは、絵本をつくる「若山クラス」と、おもちゃをつくる「やベクラス」の2つに分かれて行われました。4日間の日程で、若山クラスは各参加者が「数字絵本」と「アルファベット絵本」の2作品を、やベクラスは空き缶のコマ、ペットボトルの笛、野焼と呼ばれる陶芸、謄写版を使った紙芝居をつくりました。若山クラスの絵本づくりは、大判の厚紙を1ページが10センチ四方になるように切るところから始めました。画材は水彩、クレヨンを使用しました。絵の具の使い方、色の混ぜ方から指導する場面もありました。

作品づくりを進めながら、各自が持ってきた作品を若山さんが見て指導するという事も同時に行いました。数字絵本は、色紙を切り抜いてつくりました。初めて絵筆を持ったというサヤブリの高校の先生は、非常に熱心でした。

最終日、若山さんは、「ラオスにくる途中、バンコクの書店で子ども向けの本を見ましたが、訓練すればラオスの方がいい作品ができる」と評価をくださいました。このセミナーでつくった作品から出版に進めるものを選びました。現在、東京とラオスで連絡をとって進めています。

空き缶やペットボトルなど、廃品を利用したおもちゃづくりが「やベクラス」のひとつのテーマでした。参加者は熱心に、楽しく、そして器用に作品をつくっていきまし

た。ただ、ひとつ私たちの思い違いがありました。ラオスでは空き缶は、日本のようにあふれかえるゴミではなく、大いに利用され、商品価値があるということです。おもちゃづくりも子どもたちにとって珍しいものではなく、草笛やコマをつくるのはお手のもので、ルアンプラバンでのセミナーでは参加者の先生方がラオスのいろいろな手作りおもちゃをつくって見せてくれました。

では参加者にとってセミナーの意味は何だったかという、おもちゃづくりを教室という場で先生たちが率先して行うということそのもののインパクトにありました。参加者の先生たちとやべさんが、ある幼稚園を訪れ、園児たちといっしょにコイノボリづくりをしたときのこと。子どもたちがパンツいっちょになって手足に絵の具を付け、大きな白い布の上に絵を描いていくというダイナミックな作り方をしました。おもちゃづくりのノリをすでに身につけていたセミナー参加者の先生たちは、これに積極的に参加(服はちゃんと着て。蛇足ですが)。ところが当の園児の担任の先生方は、先生たるものはそんなはしたないことはしないのだという顔をしてただ後ろで見ているだけでした。先生方の意識改革をしていくことは、非常に重要なテーマであることがわかりました。これは、モノを送るだけではどうにもならないことで、現場で直接はたらきかけていく以外にないでしょう。今回、セミナーの参加者は、作品を家に持ち帰っても完成させるなど、非常に積極的でした。と同時に指摘も受けました。「期間が短すぎる」「使った材料は、ヴィエンチャンの

大きな文房具店ならともかくとして、**サヤブリでは手に入らない**と。

私たちは、先生たちが工夫して地元で入手できるものを使って、生徒たちと工作教室を開いてもらうことを期待しています。今回のセミナーは、そのためのきっかけといえます。また絵本づくりは、参加者の作品を出版していくことで、さらに今後、創作への意欲を高めてもらいたいと考えています。

なお、今回のセミナーに向けて、さまざまなご寄付のご協力をいただきました。鉛筆、ノートなど学用品は多摩市小学校教育研究会図書館部会、楽器は町田市藤の台幼児教室「ばたぼん」、お手玉、折り紙、画材などは東村山の文庫サークル連絡会、以上のみなさんからいただきました。どうもありがとうございました。

【日 程】

- 3/23(木)開会式/講演:若山「子どもが初めて出会う絵本」/やべ「紙芝居、おもちゃづくり」/紙芝居実演(青木)/お話実演(増山)/ワークショップ:若山[絵本づくり]と受講者が持参した作品の講評/やべ[廃品を使ったおもちゃづくり]
- 3/24(金)ワークショップ(前日の続き)やべ[紙芝居づくり]/現地出版事情視察(国立図書館、書店、印刷工場見学)
- 3/25(土)ワークショップ(前日の続き)/やべ(野焼の準備)
- 3/26(日)休日
- 3/27(月)ワークショップ(前日の続き)やべ:[野焼]朝5時から火入れ/幼稚園にて[コイノボリづくり]/閉会式(作品の講評、出版作品の発表)
- 3/28(火)〈ルアンプラバン〉孤児院訪問/コイのぼり贈呈、おもちゃ遊び、紙芝居
- 3/29(水)県教育庁にて若山[絵本づくり]/やべ[廃品を使ったおもちゃづくり]
- 3/30(木)ワークショップ(県教育庁にて前日の続き)

画期的な色彩と構成と造形の 絵本ができあがった

若山 憲

ビエンチャンの街路樹はひとかかえもあろうかという大木で嬉しくなったが、ルアンプラバンの「絵本ゼミ」の会場のゴムの木は、4階までも枝をのぼして驚いた。

ラオスの絵本状況がよくわからないままの「ラオスでの創作絵本ゼミ計画」であったが、ひとまず子どもの発達段階にそって「ラオスの1・2・3の絵本」と決めて出発した。

さて、「絵本ゼミ」で絵本を作りだしたらモンダイが続出してきた。

「今日の今日まで絵具や色鉛筆を手にしたことがないので描き方がわからない」と。もともと絵というものは美術教育を受けなくても描けるものと思っただけで、数日しか時間がない。しかし制作されてきた30冊近い10センチ×10センチの「ラオスではじめて制作された近代絵本」は見事なものだった。「画期的な色彩と構成と造形の演出」だった。「ラオスの若い人が作ってラオスの子どもに贈られるラオスの絵本」の出現だった。喜ばしいことだ。

これには「会」からの「豊富な画材の提供(特に折紙として持ってきた色彩紙)」が大きく作用したこともあったが、ラオスの若い人の絵の資質がゆたかであったことが大きかったのだろう。とぎすまされた造形でないところの造形が民族の資質とあいまっての美になっているのだ。ラオスの寺院や織物の造形や色彩は美しいし、豊かな美的環境を作っているそのことが大事なのだ。

1995年3月の「絵本ゼミ」は、「ラオスの近代絵本の日」として記憶さ

れるだろうし、30何冊かの小さい絵本も同じように記憶されるだろう。嬉しいことだ。

「絵本ゼミ」によって開花したラオスの絵本制作の情熱を今後にわたってわかせるには何が必要というのだろうか。「ラオスの美をラオスの絵本」に織りこむには何が大事なのだろうか。ゆっくりと考えていきたい。というか考えなくてはならない。

紙芝居を見る子どもたち

やべみつり

今回のラオス訪問は、ぼくの初めての海外旅行でした。バンコク経由でヴィエンチャンの飛行場に着き、タラップを降りた瞬間に、なぜか自分の子どもの頃の風を感じた。

翌日からのセミナーは、美しい民族衣装のみなさんに囲まれて楽しかった。やってみたいと思ったプランは、夢のようにすべて実現した。これはスタッフのみなさんの努力と、ラオスに子どもの文化を育てようという熱意によるものだと思った。

紙芝居づくりは、自作の『でてきたなあーんだ?』という、あてっこ形式のものをつくった。最初の場面は、中央に丸い穴が1つあいていて、それを抜かないで、次の場面から丸い穴の中に見える物の、場面を「ぬく」過程をヒントにして当てていく展開です。

全員で描いた場面を集めて合作紙芝居にして、速まきに見ていた近所の子どもたちを呼び、その場で実演。演じ手も観客もわきにわき、すごい熱気になった。共に楽しむという紙芝居の原点がここにあると思った。

「こういう形の紙芝居は見たことが



まき急でつくった「うなりゼミ」
(ルアンプラバンの紙芝居実演会)

なく興味を持った」「創造力をかきたてるいいアイデア」などの感想が聞かれた。

ルアンプラバンの幼稚園や孤児院で実演した時、遠足で行ったメコン岸辺の村で実演した時、どこでも子どもたちが瞳を輝かせて見入っている。ぼくはその子どもたちを見て、子どもの頃、街頭紙芝居に夢中だった自分を見る想いがして胸が熱くなった。ラオスに着いた時感じた、あのなつかしさは、これだと気がついた。自分の生きてきた時間の巻戻しフィルムを見ている様だった。

先日、ラオスSVA(曹洞宗国際ボランティア会)の野津さんから、『でてきたなあーんだ?』のワークショップを、謄写版普及と結びつけて開いたと知らせてくださった。少しずつ、日本生まれの紙芝居がラオスの地に根付いている事をうれしく思った。

発展途上国ラオス 増山正子

11か月ぶりのラオスでした。タイのノンカイから^{ミタパブ}友好橋を渡ってラオス入りしたからでしょうか。前回ビエンチャンの空港に降りたときの晴れ晴れとするようなすばらしい感激は味わえませんでした。それどころか私たちがつくった「ラオスの子どもと女性を支える会」の買い出し荷物を背負ってのあわただしいラオス入りでした。

ミタパブ橋ができて約1年、私の

目に映るラオスは様変わりしていました。カラフルなパラソルをさして二人乗りした自転車は影をひそめ、舗装された道路には、数人乗りしたオートバイが何台も何台も大手を振って走っていました。あちらこちらでビル建設の工事が進められ、埃っぽく、騒音も気になりました。季節はほんの1か月早いだけなのに、前に見たまっ青な空を見る機会にも恵まれず、周りの景色もちがって見え、あきらかにビエンチャンの街全体が動いていることを感じました。それを文明の発展というのでしょうか..。

うれしいことに、子どもたちは相変わらず子どもらしいキラキラした目と好奇心で、何処へ行っても私たちをとり囲んでくれました。

* * *

一週間にわたるセミナーを、まるで子どものように夢中になって受けている人々の姿と、熱意をもって指導される若山さん、やべさんの真摯な態度に敬服しつつ、私自身は本当に中途半端な参加の仕方だったと反省しています。

二週間日本を留守にして成田に降り立ったとき、今まで感じた以上にゴミひとつ落ちていない空港に異様なキレイさ(美しいのではない)を感じ、新宿の雑踏の中では無機質なロボットがたくさん歩いていて気持ち悪くさなりました。折しも地下鉄サリン事件で、防毒マスクをかぶった宇宙人のような映像が日常茶飯時としてテレビに流れていたのです。

ラオスの空に泳いだこいのぼり

高野はる子

「ラオスの子供に絵本を送る会」で専門家派遣セミナーを行うという話

を聞いて、野次馬の私はすぐに参加を決めた。昨年の春はじめてラオスを訪れて以来、その時の感動が体の中から離れず、つねにつねにラオス行きのチャンスを窺っていたからであった。その上、チャンタソンさんからラオス語を習い、何かラオスのお手伝い如果能たら...と考えていたのであるから、参加しないテはないと思った。

* * *

一足先にタイへ飛んだ私は、バンコクのドンムアン空港で一行を出迎えた。若山さん、矢部さん、青木夫妻、増山さん、チャンタソンさん、森さんが次々と姿を現す。無事の到着を喜ぶ間もなく、それぞれのスーツケースの他にダンボール箱数個がカートに乗っかっているのを見て、たまげてしまった。この大荷物を抱えて列車で行くの?! どう考えても無理ということで、増山さんとチャンタソンさんと私を除いた5人は、翌日の飛行機でラオス入りとなった。ちなみに、この大荷物の中身は寄付していただいたノートや絵本や文房具であった。心のこもったこれらの品は、物の不足するラオスでは大いに役に立つことはまちがいない。しかしこれらを運ぶ労力と費用を考えたとき、また援助のあり方を考えたとき、「うーん」とうならざるを得なかった。

とうとう来てしまった! ほぼ1年ぶりのラオス・ヴィエンチャンの第一印象は、車とオートバイが増えてずいぶん騒々しく埃っぽくなったなあ、ということだった。それでも東京やバンコクの騒音と排気ガスの充満した街に比べれば、なんとさわやかで気持ちの良い国だろうと思う。

ブーゲンビリヤやチャンパーの花々が、人々の笑顔とともに私たちを迎えてくれた。子どもたちの瞳も1年前と同じ様に輝いている。やっぱり来てよかった。

翌日からのセミナーは早朝から夕方まで、かなりの密度で行われた。参加者は、学校の先生方が中心であった。私はやべさんのおもちゃづくりワークショップのお手伝いをさせていただくつもりが、気がついたらラオスの先生たちといっしょになって夢中で土をこねこねしていた。廃品利用のおもちゃづくりも習った。「ゴミがこんなに楽しいおもちゃに変身するなんて夢にも思わなかった」と先生方は目を輝かせた。ひとりの先生の目の輝かきのうしろには、何十人という子どもたちの輝きが待っているのだと思うと、このセミナーの重みを感じずにはいられない。

若山さんのセミナーの参加者の中に、色鉛筆をはじめ見たという先生がいたと聞く。すでに中年に達したその先生の世界は、このセミナーによってちよっぴりカラフルになったかも知れないと思う。

若山さん、やべさんの専門家としての真摯なお姿や、チャンタソンさんの母国に対する愛情、ラオスの先生方や関係者の方々の熱意に、深く心を動かされた。青木夫妻、増山さん、森さんの活躍ぶりにも大きな拍手を送りたい。盛り沢山のセミナーの間、野次馬で参加した私は習ったのラオス語とタイ語をまぜこぜに通訳の真似事をしていただけであったが、やはり参加させてもらってよかったと思う。今度ラオスにくるときまでにはもっともっとラオス語を勉強して、ラオスと日本の架け橋になれた

ら...と思う。

ルアンプラバンの孤児院の庭で、やべさんが持参したこいのぼりを揚げた。日本のこいのぼりはラオスの空高く、今も気持ちよく泳いでいることだろう。

サポート隊から一言 青木みな子

文庫のおじさんの「やべさん」がラオスへ紙芝居とおもちやづくりの講師として行くというので、おしかけ助手&秘書として周囲の懇意も何するものぞと年度末の忙しいなか休暇をとり、夫婦でツアーに参加した。快く連れて行っていただく会の皆様、先生方に感謝。

会との御縁は、2年前同じ東村山文庫連の足立さんがPTAでチャンタソンさんの講演会を開き、文庫連にもカンパを呼びかけて下さって以来。でも、まさかそのラオスに行けるとは夢にも思っていなかった。東村山文庫連では3年前に「マリンロード・本の旅」というアジアの児童文学のリストをつくったが、その時に残念ながら『ラオスの民話』はまだ出ていなかった。でも今回『地球の歩き方・ラオス編』で「ラオスを知る本」のなかに、大好きな『東北タイの子』が入っていて嬉しかった。

『沼のほとりの子供達』ならぬ「河のほとりの子供達」にも会えるのではないかと期待はふくらむ。

そして期待通り、ヴィエンチャンの幼稚園やCCCで、ルアンプラバンの孤児院で、メコン河沿いの小さな村で、紙芝居のおかげでたくさんの子供達と遊べた。話に聞いていた通り、国立図書館の児童室にも、ルアンプラバンの県立図書館にも、本はとても少ない。でも、食べる様にウ

ティンさんの新刊を呼んでいた子や、CCCで読み聞かせ合っていた子、「できたなーんだ」に元よく手を挙げて答え、すいかの絵に歓声をあげ、蛇の絵にキヤーキヤーと逃げ出して、紙芝居を楽しんでくれた子供達の表情の何と生き生きとしていること。セミナーを企画・運営し、参加した大人達も子供達以上にノリのよい、いい目をした人ばかり。赤く白く咲きほこるチャンパの花。涼しげな木陰をつくる大きな街路樹の小さな黄色い花のえもいわれぬ芳香。色とりどりの伝統織りのスカート。メコンに沈む夕陽を見ながらのビール。それらにまじて、何よりラオスという国を慕わしいものにしたのは、今回の旅の同行者はじめ、ラオスで出会った沢山の魅力的な人々である。迎えてくれた人、送り出してくれた人のすべてにコブチャイライライ！

青木保弘

南の国の印象はどここの国でもそうだが、「焔めく太陽、乾燥した大地、緑に燃え上がる木々...」、あるいは「降り続く雨、霞む畑や椰子の木、小走りに過ぎていく人...」などである。今回ラオスに連れて行って頂いたのが3月下旬の乾季から雨季への変り目であり、丁度そのような雰囲気どちらも味わうことができたのだが、特に、ルアンプラバンの孤児院で雨の隙間に裏の小山の中腹まで登っていき、振り返ってみた景色は印象深いものであった。薄暮のなかに遠くの山々を望みつつ、足下に孤児院が静かに横たわっており、思わず陶然となってしまった。

というような旅行者としての生活感の無さの故の感想はさておき、当



195.
3/49
早朝、足立さん
アケハルマツキ少年
(ルアン・プラバン)

初、初めて社会主義国へ行くという緊張感は少なからずあった。しかし、入国に際してのおきまりの若干の滞りはあったものの、その後は街頭で軍人や警官を見かけることもほとんど無く、いささか拍子抜けするほどであった。

ただ、社会的な基盤整備の遅れは、覆いようが無く、例えば、ヴィエンチャンからルアンプラバンへの国道も危険なため、旅行者は避けなければならぬといわれているし、仮にいわゆる現代文明への発展が是としても、街頭で家庭から外に漏れてくるファミコンやテレビの音に比較して、オフィスにはパソコンではなく旧式のタイプライタが置いてあることなどのアンバランスから、今後の発展をどのように行っていくのか不安になってしまった。そして、そのことは「援助」のあり方(「物」や代替能力の提供から技術移転や問題解決能力の養成へ)も考えさせられたのである。そのような中で、参加させて頂いたセミナーツアーも基本的な技術移転の一環であり、有意義であったと思う。

いずれにしろ、ゆったりとした時間の流れと急速な現代文明の浸透とのせめぎ合いが進行しているであろうが、一旅行者としての感覚のなかでは精神的なりフレッシュの2週間であった。

「図書箱」の利用状況を調査して

サヤプリ県図書箱フォローアップ(1995. 3. 31~4. 3)

森 透

これまでに小学校などに会が配布した図書箱の利用状況を調査し、新たなニーズを把握するためのフォローアップを、サヤプリ県内において3月31日~4月3日にわたって行いました。会からは森透、そしてヴィエンチャンの国立図書館職員のイアンさんとチャンタラーンさん、サヤプリの教育局の職員が同行しました。

■サヤプリ小学校(児童数:746人 14クラス)

県内で最初にでき、現在最も生徒数の多い小学校。図書室を持っており、約2,400冊の本がある。授業時間に1つのクラスが1週に1回、図書室を利用する。授業では本の読みかせや、語りも教えている。小さい子には先生が昔話などを語り聞かせる。子どもは、それを覚えてほかの子に聞かせる。放課後にはだれでも図書室を利用することができる。

訪問したとき、子どもたちが読み聞かせや語りを披露してくれた。サヤプリのモデル校という印象だ。人気のある本は『シェンミヤン』。王様に仕えていたシェンミヤンのトンチ話だ。タイの本も人気がある。理由は絵がきれいだから。ラオスの本はきれいなカラー印刷の本が少ないのである。

必要としているものは、鉛筆、色鉛筆、紙などの教材。

■バンケン(BANKENG)小学校 ・幼稚園(児童・園児数:523人)

週1回、1時間、授業で読書の時間があり、各教室に図書箱を巡回させている。村の老人が民話を読みに来るなど、村人も図書を利用している。とはいえ、本の汚れ具合や貸出

票を調べてみると、あまり貸し出しはされている様子でもない。

ほしい本はラオスの昔話、小さい子ども向けの本、スポーツの本など。

■バンブン(BANBUNG)小学校 ・幼稚園(児童・園児数:299人)

週に1回、読書の時間があり、図書箱を各教室に巡回させている。このとき、すべての子に本が行き渡るようにしているとのこと。

ふだんは校長室に図書箱が置いてあり、子どもたちが借りに来る。この小学校の校長は、この人だったら、子どもたちはこわがることなく本を読みに来るだろうという感じの優しい女性。子どもたちも先生も、図書箱を通じて本に興味を持つようになった。記録を見ると、昨年9月に図書箱が入って、3月までの半年に、のべ2824人が本を読み、校長室に来ている。本を借りていったのは184人になる。村人もときどき本を読みに来る。

人気のある本は、子どものお化けが主人公の『カンパーピーノイ』。そしてカラー印刷の本。長い物語より短いものが子どもたちは好き。難しいものはあまり人気はない。

利用状況が良いことが、貸出票や本の痛み具合からわかる。本の綴じ

を糸で修理している。校長の意識の高さ、子どもたちへの愛情がこちらに十分に伝わってくる。田舎の小さな小学校でこういう人に出会えると、やってよかったと思ってしまう。

「来年は図書室を作りたい。教室も増やす予定。だからもっと本がほしい。図書箱を置いてから、子どもがちゃんと学校に来るようになりました」とは校長の弁。

■バンドン(BANDONE)小学校 ・幼稚園(児童・園児数:285人)

図書箱は(図書室がないので)校長室に置いてある。子どもはここで本を読み、貸し出しもする。村人も読みに来る。本の様子から利用されている感じが感じ取れる。

必要としているのは、幼稚園児向けの本、そして色鉛筆。先生が絵を描きながら、お話をするので。

■ナラー(NALA)小学校(児童: 380人)

サヤプリの中心部から車で30分ほどのところにある。先生が図書箱を置いてある部屋(図書室とはいえない、他との兼用の部屋という感じ)から教室に持って行って、授業で使う。図書カードよりノートにつける方がやりやすいということで、その

ようにしている。子どもたちは、休み時間にも利用できる。図書箱はすべての学校にそろっているわけではなく、必要なもの、とのこと。

人気があるのは、各国の昔話集、歌の本など。とにかくもっと本が欲しい。今、ある本はもうほとんど読んでしまっている。小さい子向けのもの、大きい子向けのもの、農業の本も揃えたい。農業の本は村人に読まれ、非常に役立っている。

■ナラー (NALA) 中学校

配布された本で人気のあるのはシンサイ。ラオスの有名な英雄伝。ところが図書箱に入っているのは1、2巻だけ。3、4巻がはやく読みたいとのこと。

生徒は小説を読みたがっている。現代史、英語の科学や地理の本、ラオス語一英語、ラオス語一仏語の辞書も揃えたい。

■ナクーン (NAKHOUN) 小学校 (児童数：292人)

敷地が斜面になっている、素朴なつくりの学校。担当の女性が熱心に説明する。

本は、授業で毎時間使っている。7クラスあり、図書箱がもうひとつ欲しいとのこと。1年生には先生が読んで聞かせている。子どもたちは短い話を好むようだ。一番の人気はカンパーピーノイ。これはラジオ番組でもやっているとのこと、それが人気の理由らしい。大人向けに法律の本が欲しいという。ところが、すでに置かれている法律の本を見たら、あまり手にとられている様子ではなかった。

校長は「以前よりも図書箱が置か



貸出カードから利用状況を見る。

れるようになってから子どもも大人も学校に来るようになった。来年はささやながら図書室をつくりたい」と言っていた。

■サヤプリ教員養成学校 (学生数：136人)

小学校教員養成の学校。昨年までは、小学校 (5年間) を終えた後、ここで3年間学び、小学校の教員となるシステムだった。今年からは、小学校卒業後、中学、高校で6年間学んだ後、ここで1年間学び、教員となるようになった。ここでの教科は、国語、数学、地理、歴史、絵画、教育方法など。

図書箱は図書室兼研究室に置き、毎日、授業の後に開き、貸し出しをする。学生が教育実習の前に子どもの本を読んでいくのだという。その他、図書箱に入っている本は小学校の教科書など。すでに学生たちは一通り読み終わった様子。学生たちが自分自身で読みたがっているのは小説である。同行した国立図書館の職員は、「ここよりも小学校を優先したほうがいいのでは」という意見。一冊の本を、小さい子どもなら繰り返し繰り返し読むだろうけれど、学生ではそういうことはしないだろう

と。なるほど。

図書室の利用についてのワークショップを開いて欲しいとのこと。教育心理学の本は必要ないかとのこちらからの質問に対しては、あまりピンとこないという表情をしていた。

■ミタパーブ (MITTAPHAP) 中学校 (11クラス、550人)

図書館がないので図書箱は、毎時間、クラスを巡回する。授業では、先生が生徒に本を渡して、読みたがらない子は絵だけ見ている。箱が重いので運ぶのに大変。だから布で本のラックを作るなどの工夫をしたいとのこと。また、本が足りないので、隣のサヤプリ小学校の図書館も利用している。人気の本はカンパーピーノイと昔話。

■サヤプリ高校 (13クラス、560人)

図書箱は、他の蔵書とともに、図書館に置いてあり、放課後に開く。先生が借りて、家で子どもに読んで聞かせるという使い方もある。生徒数にしては本が足りな過ぎる。また、高校生が読むには、内容が子ども向けすぎる。生徒が読みたがるのは恋愛小説。図書館の蔵書の恋愛小説は表紙がボロボロになるまで読

まれている。さすが青春である。

『シェンミヤン』は、古い詩の形式で書かれている本のみがある。これは難しく、生徒には理解できないという。

(なお、調査で訪問したこの日、サヤプリ高校からあらかじめ依頼されていた書籍を贈呈した。このように、具体的に希望する書名のリストを受け取って寄付するのも、ニーズに沿った方法であろう)

図書館の活用の仕方がよくわかっていないので、図書館セミナーを開いて欲しいとの要望があった。

■エカパーブ(EKAPHAB)中学校 (生徒数：398人)

ほとんど読み終わっているのに、新しい本が欲しい。シンサイは1、2巻はあるが、3、4巻がないので読みたい。法律関係の本を教員や村人が読みたがっている。

貸出票をチェックしてみると、ほとんどの本が、貸し出されているのが1月までとなっている。なぜそれ以降の貸し出しがないのか。これに対して、「図書館担当の先生が、病気で箱があげられなかったから」という説明だった。こちらでは、担当者が自分で鍵を持っていて、出張など何らかの理由でその人が不在になると、機能停止となってしまうことがめずらしくない。しかし、貸し出しが途切れてしまったもう一つの大きな理由は、本の数が少なく、もう読んでしまったということだろう。

■SCHOOL OF ETHNIC (ORPHAN SCHOOL) (児童数：144人)

調査時、担当者が不在だったため、かわりに校長が対応した。そのため、

一般的な話にとどまった。

図書室がないので、図書箱は日替わりで各教室を巡回する。本は、読むだけでなく、書き写しもする。図書箱は生徒だけでなく、先生、村人も利用する。図書箱が来るまで、子どもたちは本を読まなかったが、今は読むようになった。現在、校舎を増やしている。教室5つと図書室にしたいと考えている。

■ノンセン(NONSENG)小学校 (児童数：494人)

図書箱は、教材置場の小屋にあった。毎時間、教室を巡回している。1、2年生はまだ文字が読めないの

で、先生が語って聞かせる。読ませたり話を聞かせることによって、子どもたちが学校に来るようになった。日本の昔話もよく読まれている。家への貸し出しは3日間としている。人気は、カンパーピーノイ。シンサイの3、4巻が早く読みたい。各国の昔話も読みたい。新しい本をもっと欲しい。

■まとめ

調査をして感じたことは、まず本の絶対数も種類もまったく足りないということ。大きい子ども向け、小さい子ども向け、それぞれの本の種類が少ない。

人気のある本は、ラオスの昔話であった。これは今後とも、充実させるのがよいだろう。また、ラジオ番組と本とのメディアミックスも、子どもに本への興味を持たせるには効果的であると考えられる。

小さい子向けとして、先生が紙芝居のように絵を描いて話して聞かせるという方法は今後、発展させてい

ける手法ではないか。これはひとえに教員の意識、意欲にかかっている。今回、非常に感じたことは、学校によって図書に対する力の入れようがかなり違うということである。それは、本を一目見ればすぐわかることであつた。ある学校では、手垢で汚れたり修繕をしてあつて、何度も繰り返し読まれていることが容易に想像できたが、別の学校ではまったくきれいというように。また、図書箱をカギでしめていて、あまり利用している様子が見えないなど。少ない本から、いかに工夫して子どもたちの感性に働きかけるかは、つまるところ教員の意識と意欲だ。

図書室活用セミナーのリクエストもある。開催するとすれば、どのような内容とするか。十分検討しなければ、単なるお祭りのイベントで終わってしまう。

おもしろいと感じたのは、村人にとっても図書の充実が期待されているということだ。しかし、限られた予算のなかで、誰を対象として、どのような優先順位でどのような本を充実させるかは、今後議論すべきテーマである。

* *

乾季のサヤプリ。道路はクルマが疾走すると砂ぼこりが舞い上がる。通り抜けた後には砂ぼこりが飛行機雲のようになって延々と伸びていく。歩いている人には大迷惑だ。私たちはフォローアップの最中、ずっと飛行機雲をつくりまくっていた(荷台に乗っていた私たちは対向車が来ると、被害者にもなったけれど)。ふと、日本の花粉症用のマスクを売れば一儲けできるのではと、捕らぬタヌキのなんとかかをしてしまった。

ワークショップの報告 (第1回)

あさぬまちずこ

パントマイマーのあさぬまちずこさんの「身体表現によるワークショップ」が、1995年4～6月、ラオス国内3か所で行われました。あさぬまさんは、93年に会とともにラオス各地で公演した、子ども向け芸能小集団「みつめ遊戯団」の座長です。今回のワークショップはあさぬまさんの発案で、「ラオスの子どもたちの豊かな感性とじっくりとつきあってみよう」と思ったのが動機だったといいます。会では、今後とも、子どもの文化に関わる専門家と現地をつなぐ企画を積極的に進めていきたいと考えています。

<ヴィエンチャンC.C.C.にて>

4/2～4/8 (実施日: 6～8日)

第1日目、まず興味をもってもらうと思い、20分のデモンストレーションから始める。ラオスでショーをするのは慣れたものなので、大盛況。しかし子どもといっしょに見てくださった子ども文化センター(C.C.C.)の職員の方々が心配していちいち説明する。「風船ですよ」「大きくなりましたよ」etc.

子どもの方がよくわかるのに、もしわからなくても自分で何か感じてほしい。少しずつスタッフの方々にも子ども自身の能力をわかってもらえるようにしようと思う。

ワークショップは自分自身でも緊張していてボロボロ。体操をしてみたが、あまりに基本的動作もできないのでびっくり。ワークショップは訳が分からなかったに違いない。次の日、誰も来ないのではないかと心配になった。

翌日、第2日目。心配をよそに、人数が前日より増えている。いちばん大きな部屋にギューギューづめ。スタッフの方々も「あさぬま」とか「ちずこ」という名前を覚えるのがむずかしそうなので、勝手に大好きな花から「チャンパー」と名付ける。これなら、すぐみんな覚えてくれて、呼んでくれる。昨日、1晩かけてプ

ログラムを練ったので、落ちついて始まる。体操は簡単なものにし、毎回同じものをしばらく試みることにする。今、正しくできなくても、回を重ねれば少しずつわかるだろう。ヒューヒュー言いながら、子どもたちは楽しそうだ。

リズム打ちをする。1、2、3、4と数で数えるのはたいへん得意。それなのに、音楽に合わせると手拍子もちよっとたいへん。日本から持って行った子ども用の音楽で、ゆったりしたものだが、ラオスの音楽に比べるとそれでも早いのかな?と思う。2、3種類リズムを打ったり合わせて歩いたりと考えていたが、今日は無理で、とにかく手拍子を打つ。最後に「風船になってみよう」というのを実施。マイムのテクニックを教えるつもりはないので、子どもたちに勝手に自分なりの風船のイメージを膨らませてもらいたかったが、私が動いてみせない限り誰も何もしない。動くとそのまま真似するだけ。私はガッカリ気味だったが、スタッフの方が「子どもがとてもおもしろい」と、しきりに感心している。まだ先は長いだからいいことにしよう。おしまいのリラクゼーションの時、「空に向かってファーッと息を吐く」という深呼吸をすると、ワークショップ中に心を解放した子ども

たちは、それぞれファーファーと空に向かっていく。それ、それ、それでいいのだ。「風船になってみよう」は、まだ早すぎただけだった。

第3日目は土曜日で、学校は休み。それなのに子どもたちがたくさん待っていて、私が着くと「チャンパー先生」と駆け寄って来て、ソロソロ建物に入って行く。しかし教室の入口にスタッフの方が立って1人1人名前を確認し、20名限定にしているようだ。確かに20名が限度の広さではあるが、みんな待っていてくもののに、と思う。しかし、C.C.C.のシステムの事はよくわからないし、ほんとに60人くらいいると動きが限定されてしまう事も確かで、たいへん複雑な心境となる。20名なので、確かに進行はスムーズに行く。

今日は体操、リズム打ちのあと、絵本を見せて、その動物になってもらった。誰か(いつも同じ子)が始めると、全員その真似をする。全員、同じ。10種類くらい全員でやってみたあと少し休憩を入れ、1人1人に「どの動物が好き?」と聞き、その動物になってもらう。1人1人バラバラなので、今度こそ自分で考えなければいけない。やはり好きな動物をやらせると、すばらしかった。

やたら暴れるゾウや顔だけやたら怖いワニがいた。1人の女の子(例

えばウサギ)と1人の男の子(例えばトラ)が会ってあいさつをする、というのもしてみた。出会ったとたんに強そうなトラがつられてかわいいうさぎになったりした。

気がつくのと、正しくやらせようと必死だったスタッフの方が笑い転げている。次に何が飛び出すか、スタッフの方自身が期待している。子供はたくさん可能性を持っている。きつとだいじょうぶ、と確信を持つ。

山あり谷ありの第1週だった。私自身、手さぐりで、いつも冷や汗をかいていた。しかし何よりも、子どもたちが楽しんでくれた事はよかったと思う。

5/22～5/30

作品はたいへんうまく進行しており、C.C.C.館長のダラーさんもたいへん喜んでくださって、子どもたちの作品で幼稚園を3ヶ所も回るようになった。子どもたちも大騒ぎではあるがよく内容を理解してくれている。ずいぶん良くなったが、音楽に合わせて、というのはまだまだ不得意。しかし少しずつ分かってはきているようだ。

感心したのは、途中、本人の都合で男の子を2人メンバーチェンジしたところ、他のメンバーが新入り2人を必死でフォローしようとするのだ。無責任な私がほうっておくと、翌日には他メンバーの指導で新入りがしっかり覚えている。よく見ているわけではない。たまたま近くにいる人が教えている。そして時々自分もわからなくなって、他の人に確認している。

私の作品は音楽劇なので、それぞ

れパート、パートで動きが違う。ある日、試しに練習終了後、音楽を流したまま昼寝をきめこんで、時々横目で見ている。子どもたちは人がやっているパートほどやってみたいものなのだ。キャストの大移動が始まった。お互いに教えたり真似したり、かなりメチャクチャではあるが、すごいエネルギーだ。ずいぶん間違っていたが、知らぬ顔をしていた。自主的に表現しているシーンがたくさんできたのだ。あとは少しだけほんとうのキャストにもどった時、交通整理をすればよい。子どもたちの自主性、他人に対する思いやりに、すっかり舌を巻いた。

子どもたちはすばらしいが、どうも噛み合わないのがスタッフだ。1人1人はたいへん良い方々だが、仕事の内容の問題。会の現地スタッフのパダペットさんと相談して、私の「C.C.C.リハーサルスケジュール」を立て、紙に書き、わざわざ2人で(正確に言うと、もうバイクに乗れない彼女のためにパダペット一家総出で車に乗って)C.C.C.を訪れ、スケジュールの確認をした。ところがその日によって、先にラオダンスの先生が来ており、私の場所がない。もし都合でスケジュールに変更があ

るのなら、私は午前中もC.C.C.で教えているので、その時言えばこと足りるはずではないか、そこがよくわからない。「私は何時から?」と聞いてもわからないのだ。ラオダンスの時間は先生が終わりたくなるまで続けられる。2～3回続いたので、ある日かなりムツとしていたのだが、私の顔のつくりの都合で、全然通じなかった。頭にきたので、翌日遅れて行った。やっと初めて盛り上がっているとスタッフが来て「ダンスの先生が待っているので、きりの良いところでよろしく!!」私は頭にくると全くラオス語がしゃべれなくなってしまった。その時もやっと「どうして?」としか言えなかった。「ダンスの先生は忙しい」というのが答え。

その他のインフォメーションもとにかく悪い。5月29日に幼稚園で公演することですら、子どもたちから聞いたのだ。ラオス語がよくわからない私に話すのが面倒なら、事務所に連絡をくれればよいのに、それもない。パダペットさんも事務連絡等でかなり難儀している様子。1枚の領収書を手にいれるのも、結構たいへんそうなのだ。(あさぬまさんのレポートは連載でお届けします。お楽しみに。)

東京事務所から

野口 朝夫

●東京事務所でスタッフを雇用●

東京事務所が4月から変わった。待望の有給スタッフが勤務を始めたからである。ラオス事務所には有給常勤スタッフがいたものの、東京ではこれまでずっとボランティアだけで、時間をやりくりしながら運営し

てきた。しかし増大する事務作業の処理には十分でなく、皆さんに多くのご迷惑をおかけするとともに、本業を持つボランティア自身にとっても、作業の絶え間ない増加に疲労感が増し、危機感をつのらせていた。

そこで会の乏しい財源から何とか

経費を捻出し、週3回の有給スタッフを雇用することとなった。彼女の名前は赤井朱子。すでに半年勤務しているので電話で彼女の声をお聞きになった方もいらっしゃると思う。今年学校を卒業したばかりだが、会の活動歴は2年以上。ラオスへの渡航歴4回、地方へも足をのぼしており、活動を熟知しているので心強い。参加のきっかけは、学校で採ったアジア理解講座の講師が会の代表であるチャントソンで、ラオスへのスタディ・ツアーに参加したことだった。今年6月には「みつめ遊戯団」として、ラオスとヴェトナム各地でパントマイムの公演旅行に参加している。皆さんよろしくお願ひいたします。

●専門家の参加を呼びかけます●

現在、会の活動の課題は、いかにして会の専門度を高めていけるかということである。これまで出版事業は現地コーディネーターのアドバイスを受け、現地カウンターパートに協力するという形で進めてきた。それが軌道に乗ってきた今、いかに質

を向上させるかが課題になり始めてきている。本当のところこれらの分野では非専門家である我々の持つ知識で的確な判断をなすうのか、いささか心配になってきているのだ。誤った判断をするというより、非常に効率が悪い手順を採っていたり、優先順位をまちがっているのではないかなどの不安である。

この秋からヴィエンチャンの小中学校の図書室の整備事業を開始した。これまでの経験から、識字教育の推進には、本のある環境を子ども達の身近に作る事が大切であることを痛感している。そこで全国での学校図書室の展開運動の手始めとして、まず首都で始めたのである。教室に本棚を入れ、本を持ち込み、整理し、利用セミナーを開き、先生、生徒に読書の楽しさを伝える。これらはもちろんラオスの国立図書館のスタッフと共同して行っていることなので、それほど間違いはないだろう。しかし、より効果的に行うには、この段階ではこのようなことを考えておい

た方がよいとか、子ども達にはこうアピールしたほうが良いといったノウハウを会を持っていない。どうもそのことが気になるのだ。

子ども文化センターの絵画教室、音楽教室の先生はラオス人の専門家だが、もう少し違った指導方法はないかなどと考えるものの、こちらには専門性が十分でない。今号掲載したように、あさぬまちずこ氏の身体表現の指導は大変好評であった。それは、彼女がパントマイマーとしての専門性をもって、子ども達、先生方を指導できたからだろう。

そこで今後積極的に、子ども文庫、学校図書館、児童館活動の経験者、また児童絵画、音楽、理科工作、体育スポーツなどの専門家の方の活動への参加を呼びかけていきたい。そして夏休みなどを利用して何回か現地に赴いていただき、アドバイスをさせていただいて、活動の質を向上させる必要があると強く考えている。

皆さん、ぼくが私という方はいらっしゃるでしょうか。

ありがとうございました。

ご寄付・ご協力いただいた方々[1995年1月～9月]
延べ523件(匿名希望者含む)。『絵解き辞書』、イベントへの寄付も含まます。

1月: 明石隆 天上知子 荒井奈々子 荒井ますみ 安藤輝久 李宣怡 飯岡淳子 飯塚真 井海緑 池田裕 井坂徳明 石川計二 石川雅啓 石坂雅彦 石原明生 磯田厚子 伊藤典子 伊藤ゆき子 井上輝子 井上巳千朗 猪又綾子 内村郷美 江川徹倫 大越みち子 大杉健一 大場佳寿子 大松友紀子 岡川小津恵 岡村広子 荻原理子 奥井洋一郎 小椋真帆 小栗由季子 落合由美子 小原喜尚 各田部眞理子 葛西路 風間オトメ 柏菅啓子 柏木淑子 片桐英美子 加藤絵理子 金井恭子 金子恵美子 蒲抄稔 釜田朝 梶野倫子 茅原祥子 河合美智子 河本厚子 河本久慧 関場俊子 岸麻衣子 北島幸子 北田啓高・拓也 貴傳名哲康 君島律子 木村啓子 串崎光男 櫛田ひで子 工藤尚司(2件) 久保康行 久保田祐子 倉田三華 小池國幹 古城雅彦 小幡清佐子 小宮京子 近藤明代 斉木佳子 斎藤みちる 斉藤幸憲 坂口興昌 坂田千鶴子 坂詰貴司 坂本文子 佐藤一江 佐藤年緒 佐藤尚子 佐藤吉子 沢元真由美 塩見美奈子 鹿嶋堅資 志茂崎孝・由紀 篠原英美 柴尾真由美 柴田玲子 島川

富雄 清水福子 下福田中学校 庄子敦子 菅原弥生 鈴木昭 須永照子 須永ゆかり 瀬川順三 外尾幸子 平和彦 高野はる子 高橋一正 高橋恭子 高橋徹 高橋瑠瑞子 高村一哉・雅子 田川薫 竹田行之 武田文夫・玲子 田島伸二 多勢三枝子 立花千織 田中伸一 田中孝恵 東村康文 田淵まり子 田淵優美子 田山達也 千葉富貴子 都築伸廣 都築通子 寺下貞志 土井敦子 土井亮子 富樫万美 徳島俊子 富岡房子 富澤康之 富永幸子 豊島昌子 豊田光介 中島弥生 中村とし子 長山和恵 檜崎知行 西村健太郎 日本デザイナー学院 丹羽フサ江 根岸謙一 野口寿賀 波澄由美 祓川早苗 初島秀男 浜田知明 原田牧子 半沢テイ子 樋口昭洋 樋口妙子 肥後恵美子 久松千里 平野英江 広沢悠子・麻子 広見雅子 広山則子 藤内由美 藤森千代記 藤原牧子 藤原洋子 古澤英樹・章子・めい ポーンケオ チャンタマリー 細井洋子 保田さない 増田万里子 松浦政子 マツザひとみ 道広嘉隆 南康雄 宮井大輝 宮路恒子 宮代信子 宮本文子 村上美津子 村城裕子 森千也 森本美紀 八木左武郎 八木沢克昌 矢嶋知江美 安井清子 山口双葉 山崎完枝 山崎英明 山之内美佐子 行方久智 横川宣行 横溝清 吉村淳 脇阪則子 渡辺宇江 渡辺歴子

2月: YUN SOK HWAN 李宣怡 飯尾勝美 井上啓子 井上孝代 井上久子 鶴橋誠一 海谷博子 浦野菊男 小笠原